

## 「大学環境をめぐる厳しい状況とイノベーション」

経営情報学部大学院経営情報イノベーション研究科 研究科長  
奥村 昭博

近年、大学をめぐる状況が激変している。少子高齢化の中で18歳人口が減少し続ける中で、大学数は増加を続け、すでに日本全国で700校以上の大学が存在している。大学進学率も約60%近くなり、ほぼ志望者全入の時代に到達している。このような中で、近年、定員割れを起こす大学も続出するようになってきた。こういった状況の中で、経営困難に陥る大学も出るようになった。しかし、問題は、日本の大学の「質」にある。グローバル化が進展する中で、大学の世界ランキングが発表されるようになってきた。米国のハーバード大学などが上位にいる中で、東大が27位となるが、日本の大学が上位に占める数は少ない。今後、世界はますますグローバル化するであろう。大学高等教育という観点からすると欧米の優位性には日本はまだ劣っているといわざるを得ない。また気になるのは、米国で学ぶ日本人が減少し、中国、インド、韓国の留学生が増加していることである。これからますます「知識」が中心の時代が来ると予測される中で、日本の高等教育は大いなる危機にあるといえる。それはひいては日本の衰退にもつながる由々しき事態であるといえる。

これを打破するのは「大学自体のイノベーション」しかない。これまでひたすら大学は量的拡大を行う中で、その質の向上には十分配慮してこなかった。厳しい受験を経た後大学ではゆっくり遊べるといったことすら言われ、厳しい教育などは敬遠されるほどになってしまった。この大学の在り方を根本から変える必要がある。3つほどイノベーションの提案がある。一つは、大学自体のグローバル化である。留学生に魅力ある教育を行うことで大学自体をグローバルな標準にすることである。秋田にある国際教養大学などがそれである。第二のイノベーションの方向は、質の向上である。落第をいとわずに教育を徹底することである。米国の大学などはどんどんと落第させるし、むしろ大学院教育に重点を置いている。第三のイノベーションの方向は、「選択と集中」というものである。とりわけ中堅大学などでは個性豊かな専門特化した大学が求められよう。このイノベーションの実現には当然痛みを伴おう。しかし、それを恐れて実行しなければ、早晩日本の国際競争力はますます衰退してしまう。日本人ノーベル賞受賞者はアジア第一である。このイノベーション力を保持・発展させるためにも今こそ大学のイノベーションに着手しなければならない。幸い、わたくしたち学部・研究科は全国でもいち早くこのイノベーションの重要性に着目し学部改革に乗り出した。この改革を継続させることが必要だと痛感する。